「フィリピン系アメリカ人の音楽的ホームランド―
クリンタン音楽における真正性と創造性」

寺田吉孝
（てらだ　よしたか）
国立民族学博物館

クリンタンはフィリピン南部（ミンダナオ島、スールー諸島）に住むムスリムによって伝承されてきた旋律打楽器アンサンブルとその音楽である。これらの地域では、クリンタンは結婚式などでの余興として演奏されるほか、舞踊や憑依儀礼の伴奏音楽としても欠かせない。音楽は即興性に富み、競合的であるため、コンテスト形式で技が競われることもある。

クリンタンは、ナショナリズムに動機づけられたマニラのエリートたち（研究者、作曲家、知識人、文化官僚）によって原初的音楽伝統という位置づけが与えられ、バヤニハン舞踊団などによって「フィリピン音楽」の代表の一つとして海外にも紹介されてきた。このようなクリンタンの演奏は、都市部の学生を中心とする団員によっておこなわれ、南フィリピンの伝統継承者たちの演奏との連続性は極めて低い。そこで用いられる演奏スタイル、衣装、演出は、ムスリムに対する従来の偏見を助長する要素が多く含まれており、スペイン統治時代の負の遺産がみてとれる。

クリンタン音楽はさまざまな経路で北米に紹介され、現在ではフィリピン系アメリカ人の間で、最もよく演奏されるルーツ音楽であるとされる。音楽グループのほかに、バヤニハンをモデルにした舞踊団が数多く存在し、その多くはクリンタンを伴奏音楽として用いている。

本発表では、北米におけるクリンタン音楽の伝承に最も大きく貢献した二人の移民演奏家（ウソパイ・カダーとダノンガン・カランドゥヤン）と彼らから演奏法を学んだフィリピン系の若者たちの演奏活動や言説を検討し、クリンタン音楽がハイブリッドなアイデンティティを表現する手段としてとらえられている背景を「真正性」と「創造性」をキーワードにして探りたい。